

からだにとつて言語とはなにか

からだと言語——ふたつはどのように、私のなかでまじりあっているのだろう。からだは常に、言語の追いつかないほど膨大で、並列的な情報を扱っているし、言語は、からだは周囲の環境に向ける注意をとっても効率よく組み立て、試し、まわりに伝達しながら特異な思考や共同作業を推し進めていく。からだは言語よりずっとぐしゃぐしゃだけれど、その状態や動かし方、世界の捉え方や感じ方を言語によつて変化させられていく。同じ食べものの味を違って感じたり、こわい話を聞いて足先が痛くて痛くて仕方がなくなったり。コーチの発した一言で、スポーツ選手が、昨日と同じ人とは思えないプレーをしたりすることだってある。そうして考えていくと、〈誰か別のからだに特定の変化を及ぼすよう、私のからだにおいてチューニングされた言語〉が、日常にはあふれている。異質なからだ同士とともに生活したり、自分を異質にしていこうとするからだたちが、試行錯誤のなかで作って出してしまう、おかしな言語たち。

言語という媒体を、それを作り、発し、浴びせられるなかで常に変化し新たに生み出されていくこのからだ、という観点からとらえてみる。すると、これまで〈文学〉という名のもとに、言語を用いて制作され、読まれ、論じられてきたテキストが、からだとそのまわりの環境の、一文ごとに幾重にも織り込まれた不思議な群れとして見えてくる。

これから先、言語によって作られた小説や詩の、どんな使用方法を、私のからだは作り出していくべきなのだろう。あるいは、音や絵や映像といった、幾重もの知覚情報を扱う表現形式と、言語表現のあいだの関係は、どう紡がれていくべきなのだろう。その問いは、生活のなかで新たな生活を探るという、問いへの問いでもある。なぜなら私たちの生活ほど、もう何千年も、何万年も、変化し死に生まれていく言語とからだをなまぜにして、あたりまえのようになされてきた表現はないのだから。